

国債のカラクリ

世界大恐慌の時、ケインズ理論が唱えられた。経済は国がコントロールすべきで、金融利子のコントロールや需要と供給のバランスのかじ取りによって雇用を生み出す。そして、公共事業を増やし、不況の時、富裕層からお金を集めるために国債を発行し、景気が持ち直されると買い取る事によって、世の中のお金の流通を良くする方針を打ち出した。ところが政府は、予算の配分の時、各省庁の取り合いとなり、常に予算不足となり、その不足分を国債の発行によって補い、国の予算は、赤字がふくらみ、現在 1600 兆円にもなっています。それでも、政治家は暗黙の了解によって、国債を発行し続けています。一体これはどういう事なのだろうか。また政府はインフレ政策をとっており、金利ゼロ政策をとっており、インフレによって、借金の目減りを期待しているようです。表向きはインフレ+ 2%をめざすといっております。しかし、本音は借金は日本銀行が発行したお金で返せばよい。お金を世の中にバラマキが多すぎればインフレとなり、少なすぎればデフレとなる。微調整を国債で買ったり売ったりする、ということがみえてきます。ならば、新資本主義を唱えて、国債を借金ととらえず、日本銀行が経済の微調整として実施すればよいのではないか。